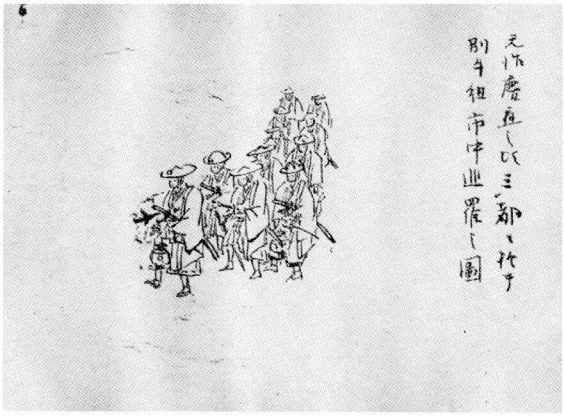
沼津市

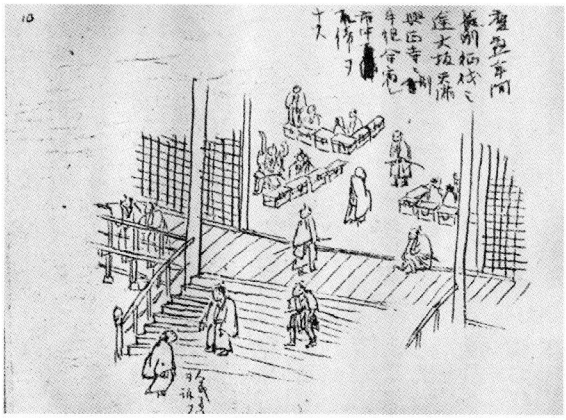
明治史料館通信

2009. 7. 25（季刊 年 4 回発行）Vol. 25 No. 2　通巻第98号

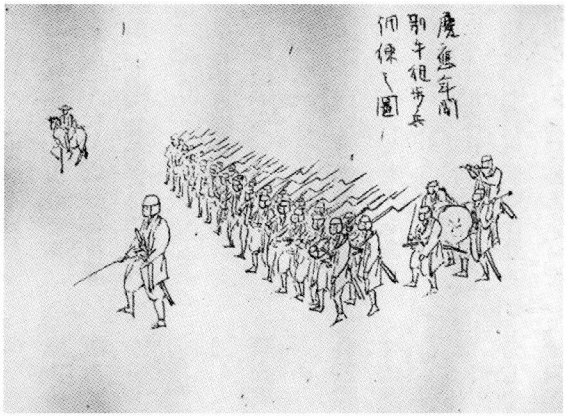


元治慶応之頃三都ニ於テ別手組市中巡羅之図

別手組志願ニ対シ元治元子年三月東京芝赤羽応接所ニ於テ外国奉行支配別手組取締等馬術験分之図于時満十四年六ケ月応接所ハ外国人応接所跡ニシテ別手組武術練習所タリ亦常ニ三四十人詰切市内取締ヲナシ或ハ外国人旅館ノ警衛ヲナス



慶応年間長州征伐之途大坂天満興正寺ニ別手組合宿シ市中取締ヲナス



慶応年間別手組歩兵調練之図

荒川重豊が描いた別手組

（荒川重平関係資料「重豊履歴画」より）

荒川重豊（徳次郎、1929 年没）は、沼津兵学校資業生荒川重平の兄で、朝臣となり明治新政府の別手組に引き続き奉職した。

江原素六とその周辺〈50〉

菜葉隊と別手組

若き日の江原素六の履歴には不明な部分がある。一八歳の時、外国人殺傷を防ぐための「番兵」になり、一日二朱の給金をもらい、半月毎に横浜と江戸を往来し勤務した。その後、「横浜を警衛の為め、外に兵隊の組織が出来ましたので私共如き士族の有志者から成立つ兵」は廃止され、給料をもらえなくなってしまったという（『急がば廻れ』所収の回想録、二八七頁、三〇三頁）。数えの一八歳は安政六年（一八五九）、満一八歳であれば万延元年（安政七年、一八六〇）のはずである。

ところが、江原自筆の履歴書には、文久「二年横浜番兵被命」とあり、年代が合わない。結城礼一郎が編纂主任となった『江原素六先生伝』では、履歴書のほうを優先したのであろう、横浜警衛隊に入り、銃や火包を背負い吉田橋の袂にあった勤務地まで半月交替で通勤したのは文久二年（一八六二）、二一歳の時だったとする。その一方で、緑色の上衣を着ていることから「菜ッ葉隊」と呼ばれた、江戸駐在のアメリカ公使ハリスの身辺警護のため設けられた騎馬隊の一員となり、その伝令使をつとめたとするが、「この騎馬隊と横浜警衛隊との連絡明瞭ならず、或は交替勤務せるものか」と注記している。ちなみにハリスは文久二年四月に日本を去っている。後に刊行された村田勤著『江原素六先生伝』では、ハリス警護の「菜葉兵」と横浜警衛隊とを全く別のものとして記しているほか、横浜勤務は二〇歳から二五歳まで続いたとする。

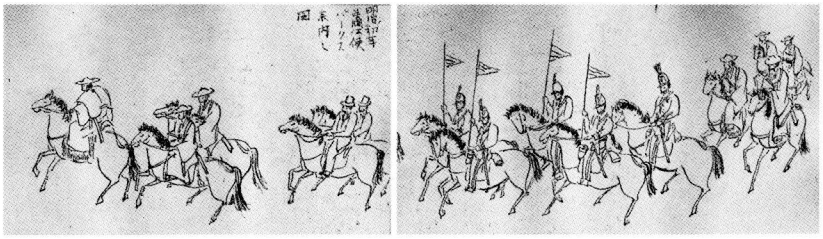
この「菜葉隊」については、当時、アメリカ公使館が置かれた麻布善福寺で英語を習っていた益田孝の自叙伝に、ヒュースケン暗殺のような不祥事が起きないように、草色の羽織を着た五〇騎ほどがハリスを護衛したもので、「隊長は有名な江原素六であった。ハリスが帰館すると、江原が宿寺の外国方役人へいちいち届けに来た。私はその時から江原と懇意になった」（『自叙益田孝翁伝』、四四頁）とあるのが、典拠と考えられる。益田は、ほぼ同じことを結城編『江原素六先生伝』に寄せた文章の中でも述べている。

江原伝の編者結城礼一郎は、後に自分の父親の伝記の中で再び菜葉隊を取り上げたが、それは戊辰戦争時、甲府へ向かった甲陽鎮撫隊（新選組）が新政府軍と戦う際に期待した後詰の兵力が「以前神奈川にいた菜葉隊」二大隊であったとする記述である（『旧幕新撰組の結城無二三』、七六頁）。この記述がもととなり、勝沼戦争に先立ち土方歳三が応援を頼みに行った相手が菜葉隊であったとする俗説が生まれたらしい（司馬遼太郎の小説『燃えよ剣』では神奈川駐屯の菜葉隊一六〇〇名に救援を頼みに行ったが断られたとなっている）。すでに戊辰時に菜葉隊は存在せず、結城の記述は明らかな誤りである。

そもそも江戸に設置された外国公使館の警備を増強すべく、幕府が従来の町奉行配下の同心らとは別に外国奉行支配手附という名の警備員を新設したのは万延元年三月のことである。さらに文久元年一月には、外国御用出役という名で、講武所で学んでいた武術に自信のある者三〇〇名を採用した。文久三年九月、外国奉行支配手附と外国御用出役は合併し、別手組と称することとなった。別手組は、「粋な講武所勇みな小づつ程のよいのが別手組」と江戸の町で唄われたように（増田わか女述「上野戦争前後」『江戸文化』第四巻第九号、一九三〇年）、庶民からも注目を浴びた目新しい軍事組織であり、天狗党討伐や長州征討にも出兵した。維新後、戊辰戦争を戦った者や静岡へ移住した者もあるが、組織としては新政府の兵部省や東京府に引き継がれ、明治五年（一八七二）に廃止されるまで外国人警備を担当した。アーネスト・サトウによれば、彼を護衛していた別手組の者は、「みな天皇の臣下になりたがっていた」

という（『一外交官の見た明治維新（下）』、二一〇頁）。ちなみに、沼津兵学校には別手組の出身者として、本多忠直・伊庭真・野口保三らがいた。

江原は文久二年九月には講武所教授方に転じたので、ハリスを警護したとすれば別手組と改称する前の外国奉行支配手附か外国御用出役のどちらかとなる。また、幕府は、ハリスら外国人が江戸の町を自由に馬で乗り回すのに苦労し、馬術に熟達した者を警護役に加える必要に迫られた（『続通信全覧　類輯之部16』）。益田孝の言うことを信じれば、江原が伝令使をつとめた騎馬隊とはこのことになろう。しかし、江原の回想録には、後に京都で会津藩士から乗馬を習うまで、馬に乗ったことがなかったとあり（『急がば廻れ』、三一三頁）、矛盾する。



明治初年英国公使パークス参内之図

菜葉隊については、益田の証言とは少し違うものがある。「神奈川に定番役があつて羽織の色が青かつたので菜葉々々と申しました下た番と云ふもありました」（「史談会記事」『旧幕府』第三巻第九号、一八九九年）という田辺太一の発言である。これによれば、菜葉隊とは治安維持・外国人警護のため横浜に配備された神奈川奉行支配定番役のこととなる。文久三年（一八六三）三月に新設されたもので、定番役頭取、定番役頭取勤方、定番取締役、定番役、定番役出役、定番役並、定番役並出役、定番役並御雇といった階級があり、元治元年（一八六四）には七〇〇人に達した（『横浜市史資料編六』）。慶応二年（一八六六）五月に廃止され、五三八人が別手組に編入された（『東京市史稿市街篇第四十八』、七九頁）。定番役からは、イギリス軍の伝習を受けた古屋佐久左衛門、窪田泉太郎（鎮章・備前守）、林八千雄（百郎）、永持左司馬、小山勝三（勝之助）らが輩出した。

定番役と同時に廃止され歩兵に編入された一〇〇〇人余の下番は、番所附下番のことであり、近郷の百姓などから取り立てられ後に足軽と改称した神奈川奉行支配下番（役所附下番）とは別とされる。菜葉隊と呼ばれたのは、萌黄地に武の一字を丸く書いた三ツ紋の羽織を着用していたこの下番のほうだったとする文献もある（『横浜市史稿　政治編二』、一九七三年、名著出版、三四七頁）。慶応三年九月時点の史料に「神奈川武兵銃隊」二大隊とあるのも同じだと考えられる（熊澤徹「幕府軍制改革の展開と挫折」）。

上野戦争で旭隊を率い戦った隊長二人、後の沼津兵学校資業生吹田鯛六は「神奈川銃隊教頭」、奥山八十八郎は元神奈川定番役だった（『彰義隊戦史』）。旭隊の隊員一五〇名も神奈川の兵から構成されたため、吹田を菜葉隊隊長とする誤解も生まれた。歩兵に編入された下番は、戊辰時には四〇〇人程が勘定奉行の配下となり「勘定所付抱組」と称し江戸に勤務していた（『復古記』第十冊、三七九頁）。

「士族の有志者から成立つ兵」が廃止されたという江原の言葉が、慶応二年五月の神奈川奉行支配定番役廃止のことを指しているのであれば整合性があるのだが、彼の履歴・年齢とは合わない。果たして江原は、外国奉行支配手附あるいは外国御用出役だったのか、それとも神奈川奉行支配定番役だったのか？　さらにややこしいのは、外国奉行管下とは別に、万延元年二月任命の神奈川奉行手附出役、文久二年八月任命の神奈川奉行支配御用出役といった名称の警備隊も存在したことである（『横浜市史　資料編六』）。

江原が所属した部隊はどれなのか、史料不足により、まだ結論を出せない。

（樋口雄彦）

お知らせ欄

◎「そろくまつり」実施結果

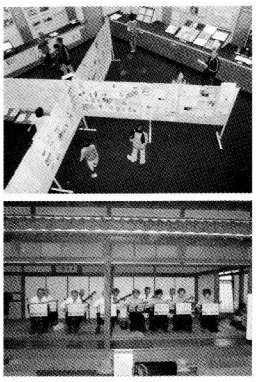
5月17日(日)「第3回そろくまつり」を開催しました。当日はあいにくの天気でしたが、800名以上の方々にご来館いただきました。今回は初の試みとして、環境に配慮し、お餅・とん汁の配布に使う食器をマイお箸・マイお椀にしました。エコ意識の高い皆さんのご協力に感謝いたします。

《実施した催事》

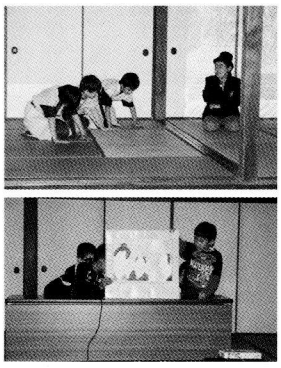
○もちつき・とん汁　無料配布
○日吉太鼓演奏

○素六音頭演舞
○体験コーナー
・竹細工　・房楊枝作り
・昔の遊び（竹馬、竹鉄砲、缶ぽっくりなど）
○映画「沼津兵学校」の上映
今井正初監督作品（東宝）

○特別展示
「子どもたちの見た江原素六」
金岡・沢田・愛鷹・門池・第一小学校4年生の総合学習の成果を展示しました。



○金岡マンドリンクラブのみなさんによるマンドリン演奏
○寸劇・紙芝居「そろく物語」
3階展示室の江原邸を舞台に金岡・沢田小学校5年生有志のみなさんが熱演しました。



また、社団法人江原素六先生顕彰会、金岡婦人学級の皆様、金岡・沢田・愛鷹・門池・第一小学校の先生・児童の皆様、竹細工体験を担当してくださった「おしえて名人」の皆様、金岡マンドリンクラブの皆様、その他多くの方々に多大なるご協力をいただきました。ありがとうございました。

◎明治史料館の夏の企画

〈戦争史跡めぐり〉

8月15日の終戦の日を前に、市内に残る戦争の跡を見学して「戦争」と「平和」について考えてみましょう。

とき　8月6日(木)
対象　中学生
とき　8月8日(土)・15日(土)
対象　親子
※8月8日(土)は特別ゲストとして沼津戦時疎開学園の当時の疎開児童の方々が、体験談をお話してくれます。

〈戦時中のくらしを体験しよう〉

戦時中の子どもたちは、どんなくらしをし、何を食べていたのか、実際に戦争を体験した方のお話を聞いたり、非常食として食べられていた「すいとん」を作って食べたりします。

とき　8月7日(金)　10時～15時
対象　小学4～6年生

〈中学・高校生のための一日学芸員体験講座〉

最近少しずつメジャーになりつつある「学芸員」というお仕事。いったいどんな仕事なのか、1日体験してみませんか？

とき　8月12日(水)　10時～15時
対象　中学生・高校生

◎「県民の日」無料開放

8月21日(金)の県民の日は、無料開放となります。
ご来館お待ちしております。

◎古文書解読入門講座

初めて古文書に触れる方を対象に開講します。館所蔵の近世文書をテキストに、武田藤男氏（元当館嘱託）が、楽しく解読法を教授します。

9月～10月の毎週日曜日　全5回
14時～16時　受講料・無料
（詳細はお問い合わせください）

沼津市明治史料館通信　第98号
編集　沼津市明治史料館
発行
〒410-0051 沼津市西熊堂三七二一一
電話　〇五五-九二三-三三三五
FAX　〇五五-九二五-三〇一八
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/meiji/index.htm